Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P 16

思考を促す応答的保育
―『受容』による対応の検証―

○竹内里絵（光沢寺中井幼稚園）　大里美保子（大和保育所）　飯田恵津子（青葉保育園）　宮原和子（第一福祉大学）　宮原英種（第一福祉大学）

応答的保育を構成する三つの重要な概念『発問』『過程』『受容』のなかの『受容』は、子どもの「自発性」を刺激し、「意欲」や「やる気」を引き出し、「思考を促すもの」であると考えられる。この『受容』には、【くり返し】【確認】【感情移入】【肯定】などの下位項目が含まれている。

本研究は、保育者によるこれらの『受容』による応答が子どもの自発的な思考を促すという仮説を検証することを目的としたものである。

方法：保育場面における子ども（6歳6か月女児、5歳6か月女児、6歳7か月男児、5歳5か月女児、5歳10か月女児、5歳10か月女児）6名と保育者とのそれぞれの対話を記録、分析した。

結果と考察：

表Ⅰは、劇の中で歌う歌の歌詞を保育者とキリン役になる子どもたちとで考え合っている場面である。

表Ⅰ　【くり返し】の対応による自発的な思考の事例

保育者	Y子（6歳6か月）
キリンが帰る時の歌、どんな言葉にしたらいいと思う？ →	えーとね、あっロケットを探しに行くから、♪ロケットを探しましょう♪にしたらいいんじゃない？
あぁそうだね【肯定】、ロケットを探しに行くんだもんね【確認】♪ロケットを探しましょう♪がいいね【同意】。どう？	
	いいねー。
それからどうする？	
	うーん
キリンってどんな風にロケットを探すと思う？ →	あっキリンってさ、背が高くて首が長いでしょ《拡大》
うん、背が首が長くて高いねー【くり返し】 →	だからこうやって(首を伸ばす格好をして)首をこうやったりしながら探すんじゃない？

保育者が、Y子の意見を【肯定】、【確認】、【同意】で『受容』し、その後「キリンってどんな風にロケットを探すと思う?」と【示唆】を与えた。この【示唆】による対応で、Y子は思考を≪拡大≫させキリンの特徴について考え発話した。保育者はすぐにその発話を【くり返し】で『受容』したが、Y子は自分の考えが受け入れられたことで思考することに「自発性」を発揮し、さらにキリンの体型から考えられる動作について「だからこうやって首をこうやったりしながら探すんじゃない？」と自ら考えたことを述べた事例である。

表Ⅱは、雨の日あまだれを指先につけてしずくを作ろうと保育者が誘った場面での対話である。

表Ⅱ　【感情移入】【確認】の対応による自発的な思考の事例

保育者	S子（5歳6か月）
何か見えるよ。よーくみて	
	あっトンネルが見えた
私、小山と木が見えたよ	
	(他児)せんちゃんもみたい
ねぇ、すごいね。しずくって	
おもしろいね。 →	先生、ここにもしずくがあった
本当だ【感情移入】ここにもしずくがあったね【くり返し】	
	きれい、ぴかぴかひかってる
きれいね、何色に見える？	
	うーん、白
白に見えた【確認】、きれいだね	
→	あっちも探してみる。

保育者の「何か見えるよ」と対応したことで「トンネルがみえた」と発話し、その後注意深く観察する姿が見られた。さらに、興味が広がり「先生ここにもしずくがあった」と発見の喜びを伝えたところ、保育者が「本当だ、ここにもしずくがあったね」と【感情移入】で『受容』した。また、その後保育者の「何色に見える？」の質問に「うーん白」と答えたことを保育者が「白に見えた」と【確認】で『受容』した。このような『受容』による対応が、子どもの「あっちも探してみる」という知的好奇心を刺激され、自発的思考を促すことにつながると考えられる。

表Ⅲは、保育者と子どもが冬眠しているクワガタの幼虫の土を入れ替える作業のあとにはじまる対話である。

表Ⅲ　【肯定】の対応による自発的な思考の例

保育者	S男（6歳7か月）
クワガタ虫は冬の寒いときは幼虫で過ごしているけど、他の虫はどうして過ごしていると思う？	
	あっ わかった、冬眠冬眠してる
あぁ、そうかもしれないね【肯定】	
	図鑑で見ていい？
そうね【肯定】。図鑑に書いてあるかもしれないね【確認】。→	てんとう虫は葉っぱの下にいるって。ほら先生！ダンゴ虫も。

保育者が「他の虫はどうして過ごしていると思う？」と質問したところ、子どもは「冬眠してる」と答えた。それを保育者が「そうかもしれないね」と【肯定】で『受容』したことで、子どもは自発的に「図鑑で見ていい？」と質問し行動を移そうとした。保育者は、すぐに「そうね、図鑑に書いてあるかもしれないね」と【肯定】、【確認】で対

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

応した。このような保育者の『受容』による対応が、S男が自ら図鑑をめくり「てんとう虫は葉っぱの下にいる」「ダンゴ虫も」と発見の喜びを保育者に告げたり、他の虫も調べようとする意欲的な行動や思考を促すことにつながった。

表Ⅳは、保育者と子どもがなぞなぞ遊びをしながら対話している場面である。

表Ⅳ　【賞賛】の対応による自発的な思考の事例

保育者	A子（5歳5か月）
おつかいに行くときは いっぱいだったのに帰りはからっぽ あっ ちょっと難しいね これなんだろう？ →	わかった。お金入れててその次にやったらお金がちょっとなくなる
あーうんうん あーそっか そっか じゃあ お金を入れるのは何だろう →	おさいふ《拡大》
おさいふ。ちょっとみてみようか？こたえ さ・い・ふ あたり。すごいAちゃん よくわかったねー【賞賛】。先生難しいなーと思ったんだけど おつかいに行くときはいっぱい入ってるのに 帰りはからっぽ ぜんぶ使っちゃうんだ →	うん　あのね
うん →	お金とおかずをね 買ったときにね、お金がなくなるからちょっとおかずが入っているからちょっと減るのよ。

保育者が「お使いに行くときはいっぱい、帰りはからっぽ」となぞなぞを出したときには、A子はすぐに答えを出さず「わかった お金入れてて その次にやったらお金がちょっとなくなる」とその想像する状況をことばに置き換えている。そこで保育者は「じゃあお金をいれるのはなんだろう」とA子が自ら考えなければならないようにヒントを与える【示唆】で対応した。その対応によってA子は思考を≪拡大≫させ「おさいふ」と答えた。保育者は答えを確認した後「すごいAちゃん。よくわかったねー」と【賞賛】で『受容』した。この【賞賛】による対応でA子は、さらに思考を拡大させ「お金が減るのはおかずを買うから」という因果関係について思考したことを発話した事例である。

表Ⅴは、保育者が『受容』をしない対応をした場合の事例である。

表Ⅴ　M美と保育者の小鳥についての対話

保育者	M美（5歳10か月）
	小鳥さん　皮だけ出してエサを食べるよ
本当だね、なんでだろう →	堅いからじゃない？
堅かったらどうして食べないのだろうね？ →	さぁ　わからん
実は食べるのに皮はどうして食べないのかな？ →	んーわからん

カナリアの世話をした後のM美と保育者の対話である。M美が「小鳥さん皮だけだしてエサを食べるよ」と保育者に話しかけてきたことを「本当だね」と【同意】で『受容』し、すぐに「なんでだろう？」と発問している。M美は「堅いからじゃない？」発話したが、その後保育者は『受容』をせずに【発問】だけで対応した。「堅かったらどうして食べないのだろうね？」「実は食べるのに皮はどうして食べないのかな？」の【発問】のみの対応に、M美は自ら考えようとせずに「さぁ わからん」「んーわからん」と考える意欲のない行動を示した。

表Ⅵは、保育者が様々な『受容』で対応した事例である。

表Ⅵ　『受容』の対応による自発的な思考の事例

保育者	A子（5歳10か月）
鹿はどうやって森や草むらに住んでいるんだろうね →	えー草とか葉っぱがいっぱいあるからよ
そうか【肯定】草とか葉っぱがいっぱいあるから【くり返し】。じゃあどうして草や葉っぱがいっぱいあるといいの？ →	うーん、あのね、鹿は草とか葉っぱを食べるのよ。だから草がいっぱいあるところに住んだら食べる物がいっぱいあるでしょ。
そうか鹿は草を食べるんだ【同意】、だから草や葉っぱがいっぱいある森にすんでるんだね【確認】 →	うん、そう。そうだ!A子もいっぱい草とか木を作ろう!

A子が動物園の「鹿を作りたい」と製作をはじめた場面で対話がはじまる。保育者が、「鹿はどうやって森や草むらに住んでるんだろうね？」と尋ねると「草や葉っぱがいっぱいあるから」とA子が答えた。その発話をすぐに「そうか、草とか葉っぱがいっぱいあるからか」と【肯定】、【くり返し】で『受容』し、さらに「じゃあ どうして草や葉っぱがいっぱいあるといいの？」と発問したところ、「うーん あのね、草がいっぱいあるところに住んだら食べるものがいっぱいあるでしょ」と自ら考えたことを述べた。さらにその発話を「そうか、鹿は草を食べるんだ。」と【同意】、【確認】で『受容』したところ、A子は「そうだ！A子もいっぱい草とか木を作ろう」と自ら思考し、意欲的に製作しようとする姿が見られた。

全体的考察：

以上のように、子どもは自分の発話や行動が『受容』されると、満足し、もう一度それをやってみようという気持ちになり、それが「自ら思考する」「自ら学ぶ」という子どもの自発的な心を育てることへとつながっていくのである。逆に『受容』されなければ、満足することができず、「自ら考える」「自ら学ぶ」ことをしなくなることがわかった。つまり、【くり返し】【確認】などによって保育者が一つ一つ丁寧に『受容』すると子どもの欲求は充足されそれによって子どもはまた次の発話をすることの動機づけを獲得していくのである。このように応答的保育の『受容』による対応は、子どもの「自発性」や「意欲」とともに「自ら思考する」「自ら学ぶ」心を促すものであるといえる。

NII-Electronic Library Service